

大通公園を望む窓辺から

新しい「3本の矢」

常任理事 三戸 和昭

安倍晋三首相は、少子高齢化に歯止めをかけ、50年後も人口1億人を維持する「1億総活躍社会」を掲げ、次の新しい「3本の矢」、すなわち「名目国内総生産（GDP）600兆円」「出生率1.8」「介護離職者ゼロ」を放った。「出生率1.8」について、1人の女性が生涯に産むと見込む子どもの数を示す合計特殊出生率は平成26年度が1.42であったが、結婚や子育てを望む若い世代が希望する希望出生率が1.8のため、合計特殊出生率を1.8まで上げて日本の総人口1億人を維持させる目的である。そのための政策として、待機児童ゼロの実現と幼児教育無償化の拡大がある。しかし、平成27年度版厚生白書の出産・子育てに関する意識調査によると、若者が子育てに前向きになれる要素は「安定した雇用と収入」「安心できる出産・小児医療の体制確保」「周産期・小児医療費や保育料など経済的負担の軽減」等である。「出生率1.8」を達成するためには、若者が安心して安全に妊娠、出産して子育てができる環境整備等の問題を解決しなければならない。日本医師会母子保健検討委員会において、妊娠、出産を経て、子どもが成長して次の世代を担う若年成人に至る成育過程における我が国の保健、医療の諸課題を示し、その解決に向けた具体的対策について検討をして、成育基本法の策定に向けた答申をする予定である。

子どもは3歳までに親孝行を済ませると言われていますが、確かに子どもの笑顔と可愛らしい態度を見ると十分尽くされていると思う。また、子どものお世話をする際に、自然と相手の気持ちを考えて、行動するため、子育てにより「おもいやり」の親教育を受けている。若者たちが子どもを持ち、子どもを育てることの喜びと楽しさをぜひ味わっていただきたい。



華やかな観光の裏側に医療あり

理事 古屋 聖兒

最近、観光と医療について考える機会がありました。平成27年10月10日北見市で、北海道地域観光学会主催の「地域における観光と医療に関する北海道・台湾コンファレンスin北見」が開催され、「地域と医療」というセッションで、宮本慎一先生（道医参与）、藤井美穂先生（道医常任理事）と一緒に、私も講演の機会が与えられたからです。われわれの講演を聴いた観光学の先生方は、「（北海道の）医療は大変ですね。」と口々に、感想を述べていました。

さて、観光と医療は共に、地域経済を活性化する地域創生の重要な切り札だそうです。観光振興により、人が動き、お金が動き、地域経済の活性化を促します。一方、地域住民の安心安全な生活と、地域の人口減を止めるためには、電気などのインフラと共に、医療の充実が不可欠だからです。

当北見市には、二つの地域に観光宿泊施設があり、年間25万人の利用客で賑わっています。これらの施設から、救急医療を必要とする患者が、年間0.01%発生しています。極めて少数ですが、その約半数が、死亡例を含めた重症または中等症の症例で、緊急・救命治療の必要な心筋梗塞症例や脳梗塞・脳出血症例が少なからず認められました。いずれも、当地域の病院で治療を行い、快復しています。

ところで、過日、世界一周クルーズの船医をしている後輩のY先生より、近況を伝えるお便りが届きました。仕事の内容は、プライマリーメディスンと検疫、感染予防、それと社交が主だそうです。しかし、航海中、4名の重症患者が出て、途中で帰国させたり、外国の病院に入院させたりしたとのことでした。

一見華やかにみえる観光の裏側には、医療の問題が隠れているのです。観光振興を地方創生の目玉にすることは重要ですが、観光客はもちろん、地域住民の安心安全のためにも、地域医療の充実が強く求められるのでは。